

長崎県地方史だより

第 68 号

題字 小曾根 星 堂 先生

出島と長崎貿易



赤瀬 浩

1 はじめに
ヨーロッパ人が日本を知ったのは、マルコ・ポーロ『東方見聞録』あたり

からですが、実際の来日は、1543年のポルトガル人の種子島漂着が最初です。この頃ヨーロッパで勢力をもっていたポルトガルとスペイン2国は貿易活動とキリスト教の布教を一体に進めるカトリックの国でした。この2国はトリデシヤリス条約・サラゴサ条約という世界の2分割を策し、その境界がブラジルと日本列島のまん中を走っていました(デマルカシオン)。西日本はポルトガル、東日本はスペインの勢力圏とされ、事実西からポルトガル人が接触してきたわけです。

ポルトガル船来航地は、より貿易しやすい条件を求めて、島津氏の薩摩から松浦氏の平戸へ、そしてキリシタン大名大村氏の横瀬浦・福田・長崎へと移動しました。

天正8(1580)年に弱小の大村氏は長崎の安泰と自らの避難地、収入の確保などを理由に長崎をイエズス会に寄進することにしました。その内容は、長崎の土地所有権・支配権・行政権・停泊税をイエズス会

に与え、大村氏自身は貿易関税のみ収納するというものでした。ここで教会領長崎が誕生したわけです。長崎はキリシタンの信者でなければ住民として認められませんでした。このように、イエズス会による長崎支配の確立・長崎の「キリシタン」化が進みました。

2 朱印船貿易と鎖国

慶長5(1600)年は、関が原の合戦とオランダ船リーフデ(エラスムス)号の豊後漂着という画期的な年でした。オランダ・イギリスの二国は、貿易活動とキリスト教の布教を別々に行うプロテスタントの国で日本にやってきたのは、貿易活動のみを目的とする商人集団でした。

当初、家康は貿易に積極的な姿勢を見せ、日本人町とそれを日本へとつなぐ朱印船のネットワークを保護しました。朱印船は、乗組員、商人、荷役などさまざまな役割を持った総合商社としての機能を求められ、長崎は町をあげて貿易商社化していき

ました。家康の死後、徳川幕府は鎖国に向かいます。「鎖国」の主要な要因はやはりキリシタン問題でした。それまでの朱印船貿易やポルトガルとの南

目次

・ 出島と長崎貿易	赤瀬 浩	1
・ 中浦ジュリアンを生んだ西海の歴史と風土	小佐々 学	4
・ 大村キリシタン史の諸問題	大石 一久	7
・ 各史談会の年間活動報告		11
・ 事務局より		14